

### 暖地における促成イチゴの電照栽培に関する研究

#### 第2報 電照方法について

大場 支 征・吉 武 貞 敏

(福岡県園芸試験場)

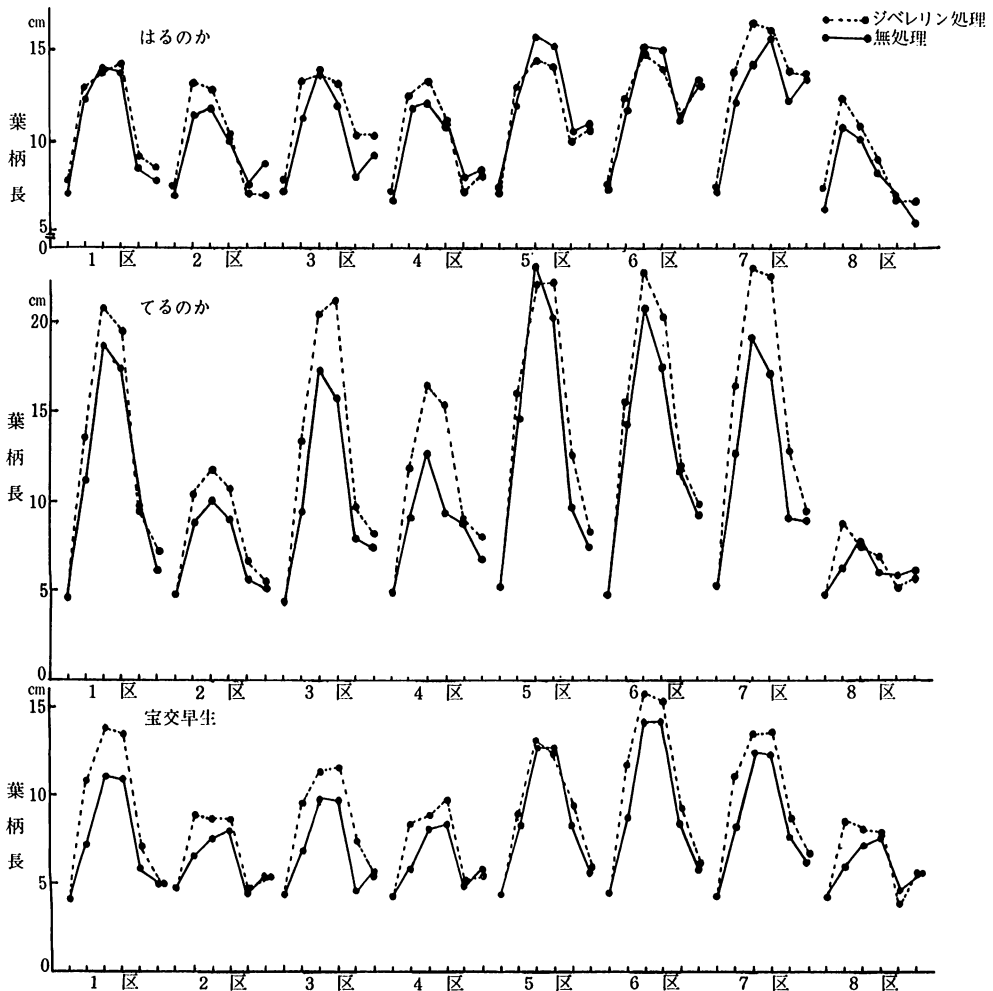
第1報では、主要品種の“はるのか”、“ひみこ”、“てるのか”、“宝交早生”について、電照開始時期を明らかにしたが、本報告では、これらの電照開始時期をもとに省エネルギーにして、かつ効果的な電照方法について検討したので、その概要を報告する。

#### 1. 試験方法

’77年は“宝交早生”を供試し、試験区として、1区光中断3時間、2区同1.5時間、3区間欠照明10分/時、4

区同7分/時、5区16時日長朝夕、6区同朝、7区同夕各補光区と、対照区として自然日長区を設け、ジベレリン(GA) 10ppmの2回処理、1回処理および無処理を組み合わせた。電照処理は10月25日から2月28日まで白熱電球を用いて行った。

’78年は“はるのか”、“てるのか”及び“宝交早生”を供試し、’77年と同様の試験区を設け、“はるのか”ではGA 10ppmの1回処理と無処理を、“てるのか”、“宝交



第 1 図 葉柄長の推移 (新生第3葉, 調査は10月27日から3月28日まで30日ごと, 1978年)

早生” においては 10ppm および 7 ppm の 2 回処理と無処理を組み合わせた。電照処理は“てるのか”、“宝交早生”では10月26日から2月28日まで、“はるのか”では11月20日から2月28日まで行った。

## 2. 結 果

1) 栄養生長の时期的経過を新生第3葉の葉柄長でみると、“はるのか”では、5区、6区および7区が、ついで1区、3区がまさり、2区、4区はわずかに劣った。GA処理間では、各区とも11月下旬まで処理区がわずかにまさる傾向をしめしたが、その後は判然としなくなった。“てるのか”では、5区、6区及び7区が、ついで1区、3区がまさり、2区は最も劣った。GA 処理間では、処理区がまさる傾向を認めた。“宝交早生”では、'77年、'78年ともに6区が最もまさり、頂果房の開花・結実期以降にみられる“株わい化”の程度も比較的軽かった。ついで1区、3区、5区および7区がまさったが、2区、4区は若干劣った。GA 処理間では、各区とも明らかに2回処理区がまさった。

葉身長、葉幅についても葉柄長と同様の傾向をしめした。

2) 開花期は各品種とも区間に判然とした早晩傾向を認めなかった。収穫期についても電照処理区間に判然とした傾向をしめさなかったが、GA 処理間では、処理区が若干早い傾向を認めた。

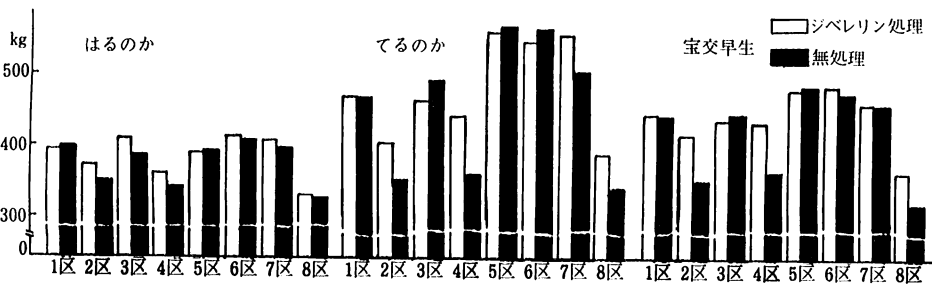
着花(果)数については、生育とほぼ同様の傾向を認

め、特に第2果房の着果数が生育の差に大きく影響されることを認めた。

3) “はるのか”では、2区、4区がやや低収をしめし、GA 処理間では、明らかに処理区>無処理区の傾向を認めた。他の区間には判然とした差を認めなかった。“てるのか”では生育のまさった5区、6区、7区がa 当り568~504kgの多収をしめし、ついで1区、3区がまさったが、GA 処理間に差を認めなかった。2区、4区はやや低収であった。

“宝交早生”は、'77年の結果では生育のまさった6区が最も多収をしめし、GA 処理間に差を認めなかった。生育の劣った2区、4区はやや低収であり、2回処理区>1回処理区>無処理区の順となった。他の区は、両者のほぼ中間をしめし、おおむね2回処理区=1回処理区>無処理区の傾向を認めた。'78年の結果では、6区、5区が最もまさり、ついで7区、1区、3区の順で、GA 処理間に判然とした差を認めなかった。2区、4区は前者に劣り、明らかに GA 処理区>無処理区をしめした。

以上の結果から、“はるのか”では、光中断3時間、あるいは間欠照明10分/時程度の処理で充分効果が期待でき、“てるのか”、“宝交早生”では、16時間日長が最も安定しているが、省エネルギーの面からは光中断3時間や間欠照明10分/時、さらには光中断1.5時間や間欠照明7分/時にジベレリン処理を組み合わせる方法も効果的であると思われる。



第2図 収量(商品果6g以上, 100㎡当り, 1978年)